

* 六分儀を発見

筆者が天文情報センターにアーカイブ室を立ち上げたのは2008年4月であった。それまでも国立天文台に残っていた貴重な観測装置等の発掘に努めていた。アーカイブ室発足から間もなく3年経ようとしているが、今まで六分儀が国立天文台で見つからないことが不思議であった。このたび、2011年3月に天文情報センターの一部に部屋替えがあり引っ越しが行われた。この引っ越し騒ぎの中で筆者の所に「六分儀」(写真1)が持ち込まれたのである。歴史的に貴重なお宝が出てくるのは、古い建物を壊す時、あるいは耐震化工事を行うため、建物の収容物を整理する時、また引っ越し作業で周辺を整理する時がチャンスだと言われている。アーカイブ室発足の頃、水沢の旧緯度観測所、現在の国立天文台水沢VLBI観測所の本館の耐震工事のため整理が行われていた時、偶然水沢に出張があり、水沢で廃棄にされる寸前のものをいくつか救い出した。この辺りのことについては、アーカイブ室新聞第3号～第5号に書いた。



写真1 今回出てきた六分儀

この六分儀は、元天文台助教授の中村 士氏が東京大学天文学教室の建屋の整理の際、譲り受けたものだという。この六分儀が中村氏から天文情報センターに委ねられたのが2007年2月21日である。中村氏から東京大学理学部天文学教室の学生実習に使われていた

ものだと伝えられたそうである。筆者はアーカイブの仕事をして始めて古い子午儀、経緯儀等を発掘していて、六分儀が出て来ないと騒いでいたのだが、やっと出てきたという思いである。この六分儀の刻印が写真2である。



写真2 六分儀の刻印

この刻印から、イギリス製ということが分かる。筆者は六分儀の教育実習を受けたことはない。筆者が六分儀についてここで語る必要はあるまい。

写真3は六分儀の天体を見る望遠鏡の視野、写真4は目盛を読む顕微鏡の視野である。

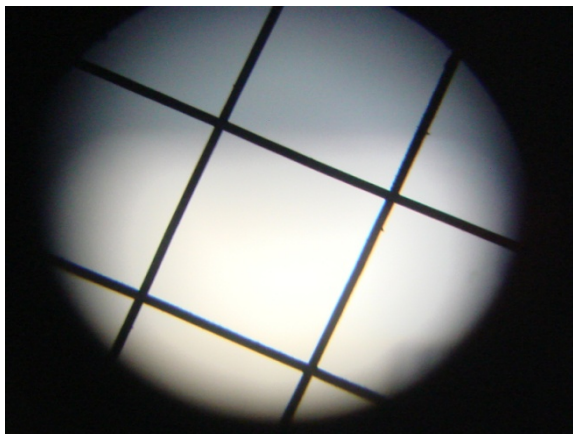


写真3 望遠鏡の視野



写真4 目盛を読む視野

六分儀は太陽、星（特に北極星）を使って自分のいる場所を知る器械である。今まで子午儀、経緯儀の視野を眺めてきたが、それらには十字線が張られていた。この六分儀の望遠鏡の視野は格子状になっている。揺れる船の上で経緯度の分かった星をとらえるのであるから、この格子状の枠の中心に入れるという方が精度がいいのだろうと思われる。減光あるいは色フィルターが半分が鏡になっている側（水平方向を見る側）に3枚、太陽を見る側に4枚のフィルターが付いている。望遠鏡は3本用意されており、交換用接眼レンズ

が2本用意されている。

中村氏のメモが添えられていて、以下のように書かれている。

六分儀 (sextant)、Rogers, London (年号不詳)

○東京大学理学部天文学教室の实地天文学演習(学部)で、昭和42~43年頃まで使用されていた六分儀。

○7~8年前に、東大理学部3号館(浅野キャンパス)の屋上にある観測ドーム内の準備室に入れてあった古い化学器具、測定器具を整理・廃棄した際にもらい受け、ある自治体のプラネタリウムで展示されていた。この展示が中止になるので返却して来たもの。

○測定精度：主尺の19度50分(最小目盛り10分で119分割)がバーニア副尺の120目盛り(実際の目盛りは60)に一致しているので、このバーニアは順読みバーニア。バーニアの目盛りの半分まで読めば誤差5秒角、最小目盛りまで読めば10秒角の誤差であり、六分儀としては標準的な測定精度である。

○参考文献：国立天文台報、第5巻、第1号18頁(2000年9月)

[記2007年2月中村士]

これらアーカイブ室新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp